

第2分科会「外国語教育」

分科会の報告と討議のまとめ

討議の柱Ⅰ 「授業づくり」

浮羽・三井支部からは、英語が苦手な生徒に視点をあてた実践が報告された。「書く」活動が苦手な生徒への手立てとして、テーマごとにつながるのある英作文に挑戦する「半分ノート」や視覚教材、家庭学習にとりくむための学習プリントや帯活動やペア学習、グループ学習などの学習形態についても報告された。

福岡市教組からは、小学校の外国語活動で英語の学習を通して、「英語を学ぶ・知る」ことだけでなく、「コミュニケーション」や「チャレンジ」することなどを大切にしてステップアップの授業展開をする中で子どもたちが楽しんで授業にとりくんでいることや新型コロナウイルス感染症の影響下での工夫として ICT を活用した自主教材が紹介された。

嘉飯山支部からは、生徒主体の授業に継続してとりくんでいることや学校全体の学力向上のとりくみについての報告、また常時活動での反復学習を定期テストとつなげることで生徒の理解とやる気につながっている例などが報告された。

意見交流では各地教委で行われている点数重視の学力向上に関するグランドデザインや授業展開のスタンダード化についての状況や小学校の外国語教育・活動における専科や中学校の英語教員の外国語活動での授業への在り方について交流があった。

討議の柱Ⅱ 「人権・平和をテーマにしたとりくみ」

久留米支部からは、点数を上げるための学力向上にとりくむ校内研修の在り方から何のための学習かを問い直し、反戦・平和にこだわった「英語の歌」や広島への修学旅行と関連させた「Peace Message」、反戦・平和の活動を行っている世界の人々を紹介する英作文のとりくみなどが報告された。

柳川・みやま支部からは、先輩教員の助言を受け、教科書の題材を通して平和について考える授業をつくっていったという教研活動を引き継いだ若い先生のとりくみが報告された。

嘉飯山支部からは、休業後の授業時間確保に追われる中でも人権・平和の視点にこだわり、9月の今月の歌に“Imagine”を扱い、当時のことを知らない生徒たちにも、歌に込められたメッセージを伝えることで平和について考えるとりくみになったことが報告された。

意見交流では、「Peace Message」の活動に関して、授業の流れについてや子どもたち様子などから、教員が何をどう扱うかで子どもたちに人権・平和に関する様々な出会いをさせることや考える機会をつくることのできることから教員の視点の大切さを改めて確認することができた。

討議の柱Ⅲ 「自己表現活動」

嘉飯山支部からは、有名人になりきって自己紹介文を書く活動および小グループで紹介し合う活動が紹介された。英語の苦手な生徒にとっても、関心のある人物について表現する活動は意欲的にとりくみやすい。この活動では、作った英作文をクイズ形式で紹介することで、英語

に対する苦手意識のある生徒にもとりくみやすい活動になったことが紹介された。

柳川・みやま支部からは、敬老の日との関連で「おじいちゃんやおばあちゃん、お世話になった方への感謝の手紙を書こう。」という活動が紹介された。生徒自身のつながりのある方々へのメッセージということで、普段は表現の乏しく感じられる生徒も、書こうとする強い意欲を感じられたこと、英語だからこそ表現できる言葉もあることが報告された。

意見交流では、手書き表現・アナログの手段の良さやデジタル活用の良さなど、表現手段の多様になった現代だからこそ授業づくりの工夫の可能性が確認された。

共同研究者からは、翻訳研究における「奥行き (depth)」という概念が紹介された。異言語を翻訳する際に、自分の言語・自文化に置き換えるだけでは理解が難しいこと、多文化に生きていると自覚することの重要性が確認された。

総括討論とまとめ

まず、人権については感染予防の中での授業づくりの困難について議論された。新型コロナウイルス感染予防対策で転入してきた外国籍の児童生徒に対する配慮の欠如、学習進度を優先するあまり子どもたちの状況に配慮することのできていない状況、活動内容の制約による意欲の低下などの弊害が挙げられた。このような状況下でも、工夫をしながら子どもたちの意欲に火をつけるような授業づくりをすること、多様性に関するとりくみを継続することの大切さが確認された。また、性の多様性についての認識を広め、深めることについても議論がなされた。現状では英語圏においても he / she を使わざるをえない状況がある。加えて、多様性が大切だと分かっているにもかかわらず、校則との矛盾に悩む参加者の声の確認された。

次に、小学校における外国語教育・活動における困難と中学校への移行について活発に議論を深めていった。小学校勤務の参加者からは、教材内容が多いことに加えてコロナ禍における多忙化が重なったことの困難、評価の問題、専科教員との連携など現場教員にかかる負担が増大している状況が紹介された。小学校の抱える悩みを組合活動の中で中学校教員と共有し、解決策を模索することが急務であると確認された。具体的には、中学校教員が小学校で使用する教材を読んで学習すること、中学校が小学校におけるとりくみを知ることなど、小学校から中学校へのスムーズな接続のためにできる工夫にとりくむことが必要であるという意見があった。

最後に、感染防止の中での授業づくりの悩みや工夫について意見交換がなされた。オンラインを活用したインタビュー活動、オンライン授業などの具体案が出された。また、修学旅行でピースメッセージを渡す際に ICT を活用する案が提案された。例えばタブレット経由で画像を交換したり、IC レコーダーにメッセージを吹き込んだり、データとして交換する手段が挙げられた。

締めくくりとして、共同研究者からは大学における授業の状況が紹介された。「学校は、テストや偏差値などといった数値化による評価にさらされている。しかし、教員には、教育を数値化から守る義務がある。数値化とは違う外国語教育の意義を再確認し、発言力を高め、多文化・異文化理解の重要性を地道に伝えていくことが大切である。」との言葉をいただいた。

来年もこの場でお互いの実践をもとに交流しあうことを確認し、分科会の幕が閉じられた。